
どこまでもすすむ

花鶏

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

どこまでもすすむ

【Nコード】

N0528R

【作者名】

花鶏

【あらすじ】

これは男であった女性の旅物語。

その女性が様々な人と出逢い、別れ、色々な経験をする物語。

ある時は大地を進みながら、又ある時は宇宙を進みながら。

様々な困難に負けずに進む旅物語。

プロローグ（前書き）

処女作になります。

至らない所が多々あると思いますが勘弁して下さい。

プロローグ

熱い……体中が熱い。

体中が熱い上に、何だか頭が凄く痛い。

その理由を確かめようと辺りを見渡すと、辺り一面が赤一色だった。

え……なにこの状況？

え……と……

と……とにかく自分の置かれた状況が飲み込めない。

自分はうつ伏せで倒れている。体中が熱く、頭が痛い。

多分ここは公園だと思う。しかし一般に言う公園とは違う点がある。

本来、土や芝生でおおわれてるべき場所が火でおおわれてる。

俗に言う火の海だ。

更に目の前に人が倒れている。

とにかく何が何だかわからない。

考えても分からない物は分からない、まず倒れてる人を助けなければ。

と、思ったが体に力が入らない、てか痛い。

体中の血液が沸騰しているような熱さと、腹部と両太股に激痛が走る。

何とか堪えて上半身を起こし身体を見やる。

うわっ……何これ酷い。

腹部にはお臍が増えたの？と思わせるような穴があいていた。

その穴から、呼吸に合わせるような一定の間隔で血が湧き出ている。両太股は縄をキツく縛ったときに出来る痕のような物が黒く出来ている。

体中血塗れだし、しかも裸だ。

倒れている人を助ける所ではない。助けを呼ばなければ。

「ヒュー……す……」

誰かー、助けて下さい。

「ヒュー……」

誰かいませんかー。

声が出ない……やばいな。

頭の痛みも酷くなってきた。このまま死ぬのかな。

やだな、何も分からないまま死ぬなんて。

目の前に靄がかかってきた。

これで終わりか。お腹減ったなあ。

そんな事を思いながら意識を手放した。

プロローグ（後書き）

うーん、どうなんだ（。、）

暗闇をすすむ（前書き）

誤字脱字発見したら教えてくれたら嬉しいですよ。

暗闇をすすむ

気がつけば白い天井を眺めていた。

ここは天国かとも思ったが違うようだ。

耳には規則正しい電子音が聞こえている、

多分心拍などをモニターしているのだろう。

どうやら助かったようだ。

もう駄目かと思ったが、結構軽症だったのか？

「あ……あゝ、あいうえお」

うん、声もでるようになった。

ここは病院の一室だろうが、何処の病院だろうか。

などと考えていたら人が入ってくる気配がした。

「おっ、起きたねー、おはよう」

入ってきたのは40歳位の中肉中背の男性、その出で立ちから医者だと分かる。

「僕は木ノ下、君の手術を担当した医者だ」

そう言う満面の笑みで笑いかけてきた。

「大変だったねー、テロに巻き込まれたんだろー」

「テロ？……ですか？」

「そうだよー、覚えてないのかい？」

テロ？何があったんだっけ。

思い出せない……なんで。

必死に思い出そうとしていたら頭が痛くなってきた。

「痛っ、頭が痛い」

「どうした、大丈夫かい？」

「思いだそうとしたら、突然頭が痛くなってきました」

「そうか、無理に思い出さなくて良いから」

そう言うと木ノ下は考え込み始めた。

頭の痛みはすぐ消えたが、だるい。

何日ぐらい眠ってたんだろ？

公園っぽい所で気づいた時は酷い有り様だったが、

今は点滴の管と、多分排尿の管が刺さってて、

胸や腹部や太股になんか貼られてる感触があるが、

体中に感じてた血液が沸騰しているような熱さはない。

その分かなりマシだと言える。

しかし相変わらず、何故あそこに居たかが思い出せない。

何故……

「ちょっと良いかな」

いきなり真剣な声で木ノ下が話しかけてきた。

「はい？」

「いやね、君、裸の状態で搬送されてきたんだよね」

「はあ、それが何か」

「うん、で身分書も何もないときてる」

「まあ、はい」

「うん、だから君の名前が分からないんだよ」

「はあ、えっと私は……」

ん？あれ。

「うん、君の名前？」

私は……

「分からない」

「やはりね」

「えっ？なんで？えっ？えっ？」

「落ち着いて」

「でも」

「とにかく落ち着いて」

「落ち着いてって、落ち着いてられるか。思い出せない。

名前、住んでた場所、国、そんな当たり前のことが」

なんで？なんで？えっ？えっ？なんで？

その時、絶賛混乱状態の私が正気に戻るほどの大きな声が聴こえた。

『寝ろ』

と、その声は深い森のような神秘的で重厚な声だった。

「いまの、先生ですか？」

「ん？なにがだい？」

「寝ろって聴こえました」

「僕じゃないよ、それに聞こえなかったよ」

「え、でも」

「とにかく、今は少しづつ思い出そう」

「……はい」

「さっきの話じゃないが、今日はもう寝て、明日また考えよう、まだ体も治った訳じゃないからね」

「はい」

「じゃ、おやすみ」

そう言うと木ノ下は病室を出て行った。

しかし、さっきの声は何だったんだろ。

記憶喪失に加え幻聴か？最悪だな。

とにかく寝よう、疲れた。

その時は、まるで暗闇の中に放り出された子供のような心細さを
感じていた。

暗闇をすすむ（後書き）

うーん、駄目すぎる。

夢の中をすすむ（前書き）

3話目。登場人物の名前考えるのって難しいよね

夢の中をすすむ

暗い。ああこれは夢の中だなと思った。どうせなら思い出せない記憶のヒントでも夢に見れたらいいのに、そんな事を思っている

「……ル」

「エイル」

声が聞こえてきた、囁くような声が。夢の中だというのにゆっくりと目が開けられていく。

目の前には黒髪の綺麗な女性が私に何かを気にしながら囁くように語りかけていた。見た感じ18歳位のおとなしそうな女性だ。

「エイル、講義中に寝たらだめだよ」

「うるさいよフリーン、寝てないから、目を閉じてただけだから」

目を開けてエイルと呼ばれた暫定私が答えた。暫定私、と言ったが、今見ている視点の人間がエイルと呼ばれたからだ。だがそれは違いかも、とも思う。

エイルと呼ばれた暫定私は、私が思ってもいない言い訳だか屁理屈のような答えを、勝手にフリーンと呼ばれた女性にかえしたし、エイルの声は男性の声だった。

その時、暫定私の頭に固い物を叩きつけたような衝撃が、スリッパで叩かれたような小気味よい音とともに走った。

「エイル・スカンディナ、フリーン・フェンサリル、私の講義中に私語とは勇気があるな」

頭の中が光る星でいっぱい、かなり痛いと思う。だが夢の中だからなのか、私は痛みを感じなかった。

「痛いですよ先生」

暫定私はやはり勝手に口を出した。

やはりエイルは私ではないのだろうか。

性別も違うし、夢って多分自分が主人公だと思うから。思っていないことを勝手にしゃべったり、痛みをまったく感じないと言うのは違う気がした。

と言う事は、これはなんだ？

……分からない。

まあ夢の中で考えても仕様がなない。とりあえず夢か妄想と言う事にして、エイル君の視点を楽しもう。と樂觀的に考えてみた。

「先生、何で俺だけ叩くんですか？」

「それはこのエーギル・ミスコルの信念だが、女性は怒りはするが叩かない」

「うわ、男女差別だ」

「うるさい。とにかく、この講義は貴様らに大変大事な講義だ、まじめに聞いておかないと後悔するぞ」

「はい」

エイルとフリーンは声をそろえて返事をし、まじめに講義を聴きだした。

エイルの視覚から入ってくる情報をまとめてみる。

ここは講義室のようだ、前しか向いてないから正確には解らないが、300人ぐらいの人間が講義室の中にいるようだ。フリーンを含め皆同じ制服のようなものを着ている。という事は学生かとも思ったが、年齢がまとまってないような気がする。フリーンは18歳位だ

し目の前にいるピンクの髪の毛の女の子は12歳位だろう、前の方にいるごつい男性は30歳位に見えるし。さらに驚いたことに、前の方になんかゴリラのような人？が居る。いやゴリラが服を着て居る、と言う表現が正解だろう。他にもなんか変なのがちらほら混ざっているが騒ぎにはなっていないので、この夢か妄想の世界では当たり前な事なのだろう。まあ、夢か妄想だし気にしたら負けだね。次に耳から入ってくる講義の内容を分析してみよう。

「……であるからして、このようなモンスターと接触した場合、軍から支給された攻撃用デバイスで対処すること」
「ん？ もんすたー？ 軍？」

「また、基本的に発展レベルが3以下の惑星でのデバイスの使用は禁止されている。その場合は当該惑星と同レベルの武器などを作成、または現地調達して対処すること」

はい無理、意味分かんない、なにこの夢妄想。

なんかこういう物語にあこがれてんのか私？

でもよく考えれば記憶が思い出せない私には何が基本になるのか分かんないってのが正直な所だね。現実世界で見た人間って血まみれのひと、木ノ下先生だけだし。あの病室の外にはゴリラのような人とかモンスターとか普通にいるのかも。目が覚めたら聞いてみよう。それにエイルにかんしても確かに声は違うけど、エイルにしても現実の私にしても、鏡とか見てないから顔がどう違うって言えないし。あ、そうすると夢とか妄想じゃなくて、記憶の可能性もあるのか。そもそも妄想と夢は何が違うんだと、うわー、だんだん分からなくなってきたー。

そんな思考の迷路にとらわれていると、講義が終わったのか先生が退室していった。

「エイル、この後お昼どうするの？」

「食堂で食べるよ、フリーンは？」

「私も食堂」

「じゃ一緒に行くか」

「う……うん」

そんなやり取りをすると、エイルとフリーンは講義室を出ていく。しかし先ほどのやり取りで分かったことがある。フリーンはエイルの事が気になっている、簡単に言うと思う、と思う。嬉しそうにほほをほんのり染めてたし。エイルは俗に言うリア充だね。リア充しね、とかもげろ、とか私は思わないよ……多分。なんて考えていると体がふわりと持ち上がる感じがした。あ……起きるのかなー、起きるんだなー。そして目の前が白一色に染められていった。

夢の中をすすむ（後書き）

うーん、まとまっていな。更新は2・3日に一回出来ればいいな。

色々すすむ（前書き）

タイトルすすむ縛り、既に軽くだるい。

色々すすむ

翌朝、目が覚めて顔を洗って手鏡を覗いたら凄いことに気がついた。昨日夢の中でみたフリーンが写っていたのだ。その後木ノ下先生に夢のこと、自分がその中に出てきたフリーンと瓜二つなこと、そして自分の視点はそのフリーンではなくエイルであったことなどを話したが。

「それは記憶に関係しているかもしれないが、記憶ではない」と言われ少し落胆した。

夢の中で考えていたことや、疑問に思ったことを聞いたのだが、そのほとんどは現実とは違っていた。

先生との会話で分かったことをまとめると。

この場所は日本、横浜の国立病院であること。ゴリラ型の人間とかは居ないこと。もちろんモンスターは居ない。日本には自衛隊はあるが軍隊はないこと、ましてや12歳位の子供は入隊できないこと。そして記憶でないのなら、そのヒントを第3者視点で、用はエイル視点で見ているのではないかと言うこと。このまま傷が治るまで入院なのだから、ゆっくり思い出していこう、その夢は記憶を思い出すきっかけになると思うから、見た内容を覚えてる限り話して欲しいと言われた。

とりあえず私は名無しさんからフリーンさんと呼ばれるようになった。また先生の方でフリーン・フェンサリルと言う名で搜索願ひ等がないか調べてくれるそうだ。

しかし暇だ、1日ベットで安静にしているのは意外と心身ともに疲れる、記憶がないという不安がさらに心を疲れさせる。しかし暇な時ほど考えてしまう。

なぜテロに現場に居合わせたのか、なぜ記憶がないのか、テロにあ

「だったら警察に事情聴取等を受けるのでは？病院の入院費用等はどうなるのか、後払いでいいの？てか払えるの？夢の中ではなぜエイルとして夢を見ているのか、とか疑問は尽きない。しかし考えても解決しなさそうだ、ならば夢を見て記憶を取り戻すきっかけを作ろうと決意して、1日を終えた。」

「いいか良く聞け」

目の前では昨日夢に出てきたエーギル先生がスクリーンを指しながら話している。

「おまえ等に支給されたデバイスがもう手元にあると思うが」

昨日見た続きか？

「デバイスには精霊の欠片が封印されている、その事により精霊の力を行使できる」

何、精霊って？

「フリーン、精霊とは何か説明しろ」

「はい」

先生に指名され私の隣にいたフリーンが静かに立ち上がった。やはり私はエイルとして夢を見ているようだ。

「スピリットとは精霊のことです、様々な使用方法がありますが、代表的には四精霊^{エレメンタル}、水、火、風、地の精霊の力のこもった欠片をデバイス内に封印し、その力を借りて炎を出したり、水を出したりすることが出来ます」

「よし80点だ。四精霊の他にもレアだが精霊の欠片は存在する、そしてデバイスには1種類の精霊の欠片しか封印できない、お前たちには事前のテストで分かった適正別に精霊の欠片の封印された、攻撃用、防御用デバイスのどちらかが支給されている。成果を上げ

て階級があがれば自由に変更申請も出来るようになる、とにかく今は支給されたデバイスを極める。明日は実地訓練だ、今日は早めに睡眠をとるように、以上」

そう言うと先生は講義室を出ていった。

なんかよく分からんのが出てきたな。精霊の欠片の力？魔法みたいなものか？ファンタジーの世界だなまったく。考えている内にも夢はすすむようだ。フリーンが話しかけてきた。

「エイルは攻撃用のデバイスだよね？何の力が封印されているの？」

「俺のは風だよ、フリーンは？」

「私は水の防御用デバイス」

「へー」

「で、実地訓練は2人1組でやるって話だから……私と、く、組みましょう？」

「マジで、……そうだな、防御型は支援もできるんだろ、なら願ったりかな」

「決まりね」

「ああ」

昨日はフリーンがエイルに気があるのかと思ったけど、本気^{マジ}だな、何となくだけど。

しかし、なんか分かんないことだらけだな、ファンタジーとSFがミックスされた世界観か、話したら笑われそうだな。てか夢の中で寝たらどうなるんだ？エイルは今寝る寸前だが。そして目の前が暗くなっていった。

色々すすむ（後書き）

……うん、たん。

実地訓練ですすむ

目を開けるとそこは森の中でした。

夢の中で寝たらどうなるのかも思ったんだが、長めの瞬きをした感じで、目の前の景色が変わっていた。

「では各班で実地訓練を行う、この森のモンスターは弱いモンスターばかりで問題ないが、危ないと思ったら各班に渡した救難灯を使うように。すぐに俺か、他の先生が駆けつける」

「またモンスターを倒すと、モンスターは結晶になる、それを多く集めた班が最優秀賞として、食堂1ヶ月食べ放題券が進呈される」

静かに聞いていた生徒たちから歓喜の声が聞こえる。エイルやフリーンもかなりやる気のようなのだ。

「また、モンスターの結晶は売れば金になるがすべて提出すること。この森は軍の私有地だ、そこにあるすべてが軍の所有物になる、以上だ。2時間後にこの場に集合、では開始」

そう言うのと各班動き出した。

エイルはフリーンと約束道理、班になったようだ。

森を進むと大きなトカゲのようなモンスターが現れた。トカゲにしてはデカすぎる、大体尻尾から頭まで5メートルはある、胴回りも直径1.5メートル位はある、まさしくモンスター。

「フリーン援護頼む」

「了解」

「風の刃」

そう言うときエイルは右手を頭上に掲げ、腰の位置まで勢い良く振りおろした。その刹那、デバイスから突風が巻き起こり、薄いエメラルドグリーンの風の刃が出現した。

「水の守り」

フリーンは、右手をモンスターに向けて突き出すと、デバイスから水が噴き出しエイルの周りに薄い霧のような物を展開した。

モンスターは危険を察知したのか口を大きく開けて炎を吐いた。その炎はエイルに一直線に向かっていったが、直撃する直前で霧のような物に阻まれ四散した。

「これで、終わりだあ」

エイルが気合いの入った雄叫びとともに、モンスターの頭から胴にかけて風の刃を振り抜いた。

GYAaaaaaaa

モンスターは断末魔の叫びをあげると、直径2センチの赤い結晶になった。

「よし、完璧だっ」

「エイル、水の守りがあるからって、攻撃は交わした方がいいよ」

1人喜びを爆発させたエイルに、フリーンは少し怒ったように言った。

「ばか、フリーンの援護を信じてたから良いんだよ」

「もう」

そんなやり取りをしながら、モンスターを倒していった。

2時間後集合場所に戻ると、集められた結晶の重さを量り、もつとも重かった班に賞が与えられた。残念なことにエイル・フリーン班は2位だったが、怪我無く帰ってこられて良かったと私は思った。

実地訓練ですすむ（後書き）

ちょっと短いです。すいません。

整理がすすむ（前書き）

更新遅れた＞（　　）＜すいません。

整理がすむ

実地訓練が終わった後も、様々な訓練が行われた。砂漠でのモンスタ―退治。山の中に入っののモンスタ―退治。海でのモンスタ―退治。てかモンスタ―退治しか夢に見ない。こんなんで記憶のヒントになるのかな？

そんなこんなでエイルとなつて夢を見始めてから1カ月位たつた。その間に記憶を思い出すことはなかつたし、幻聴が聞こえることもなかつた。しかし体の傷などに関しては回復しつあつた。傷口はふさがり、痛み自体もなくなつていた、少し違和感はあるが数日のうちになくなりそうだと思う。

「木ノ下先生、そろそろ外に出たいんですが」

「いやあ、まだ早いな。記憶を思い出さなきゃ外に出るのを許可できなないよ」

「でも、もう自分で歩けますし、痛みもないですけど」

「でもまだ早いよ」

「そう……ですか」

おかしい気がする、先生はこんな1カ月たつても病室から出してくれない。

「ああフリーン君、ノートを渡すからこれまでの夢の事や気になる事を書いてくれないかな」

「え？良いですけど何の意味が？」

「もしかしたら記憶の手がかりになるかと思ってね」

「わかりました」

そう言って先生からノートと鉛筆を受け取る。

「じゃあ今日はこれで」

そう言う先生は病室から出て行った。扉が閉じるとともに小さな電子音がした、扉に鍵がかかったんだろう、普通そんな病室はないと思う、これじゃ牢獄みたいだな、そんな事を思いながらこれまで見た夢の事や気になった事をノートに書きだしていく。

自分には記憶がない。

記憶はないが日常生活に不便はない。

なぜかテロの現場にいた。

幻聴が聞こえた。

記憶の手がかりかもしれない夢を見る。

夢の中では自分はエイル・スカンディナ。

夢の中では自分の思った通りに行動できない、むしろ勝手にエイルが動き、それを見ている感じ。

エイルにはフリーン・フェンサリルと言う友達？が居る。

現実の自分はフリーンにそっくり。

エイルとフリーンは軍直轄の士官学校の生徒。

その学校には人型ではなく、ゴリラのような獣人？のような生徒もいる。

士官学校では主にエーギル・ミスコルに指示している？

軍からデバイスと言う名の武器を支給されている。

デバイスには攻撃用と防御用があり、万能デバイスが開発中。

デバイスの中に精霊の欠片が封印されている。

デバイスは精霊の欠片の力を引き出し様々な使い方ができる。

精霊の欠片は純度や大きさによって引き出せる力が変わる。

代表的な精霊は水、火、風、地の四精霊、そのほかはレアらしい。

精霊の欠片は純度100%の聖霊の欠片と呼ばれるものがあるらし

い。

夢にはモンスターとの戦闘がたびたび出てくる。

モンスターは倒すと結晶になる、売ればお金になるらしい。

たびたび実地訓練で宇宙船に乗って他の星に移動する事がある。

しかし、士官学校のある星の名前は解らない。

今のところこんなものかな。

しかし外に出たい、体を伸ばしながら体中の関節を鳴らしながら1人ごちる。

絶対に体なまってる。

はあ……やる事も無いし、また夢を見ますか。

整理がすすむ（後書き）

うーん、中々進まないね（一一）。
書きたい事が多すぎて大変だ／＼（^o^）／。

スリープワープですすむ(前書き)

2連ちゃん投稿(＊＾。＾＊)

スリープワープですすむ

「エイル、初めてのスリープワープ使用の实地訓練だね」

フリーンが目の前で話しかけてきた。

ああ、いつの間にか夢を見ていたのか。

「ああ、スリープワープ
SWね」

「SWの仕組み知ってる？」

「……知らない」

「なら教えましょう」

につこりと笑いながらフリーンが説明を始めた。

「まずSWとは、簡単に言えば並行宇宙型ワープと言われるものをするんだけど。一旦、時空の異なる別の並行宇宙へ移動して、また元の宇宙空間へ戻るという物なの、時間の流れが異なるため、瞬間移動したように見えるし時間的に一瞬で移動できるんだけど、時空の異なる別の並行宇宙では、移動するのに時間がかかってるから、戻ってきたとき中の人間はその分年をとってるの。だけど元の宇宙空間では一瞬。だから一瞬で何年も年をとって移動する事になる。まあ年取った分だけ並行宇宙を移動してるんだけど、その移動中年をとらないようにコールドスリープするの」

「でコールドスリープってのは、まあ簡単に言うと人体を低温状態に保ち、目的地に着くまでの時間経過による老化を防ぐってものなんだけど、体の方は問題なく老化はしないけど、記憶の方が劣化しちゃうのよ」

「ええ、じゃあだめじゃん」

「でもそれも克服されたの、記憶をデータにしてこのメモリーチップに吸い出して保存しておいて、コールドスリープから起きるときにまた脳にもどすの」

「ああ、事前にもらったメモリーチップでここで使うんだ。しかし、マジで怖いな」

「まあ、もう導入されて20年以上たってるし大丈夫よ」

記憶、吸い出す……。

「じゃあ、スリープ室に行こう」

「ああ」

そう言って移動した部屋は、だいたい2メートル半位のカプセル型のベットが100個以上と、その後ろにすべてのカプセル型ベットから出たコードが繋がっている、直径1メートル位の黒い球体の良く分からない物があった。

「なにあれ？」

「うん？カプセル型ベットがコールドスリープ室、黒い球体が聖霊の欠片の封印された万能型デバイスで、そのデバイスで記憶の吸い出しとかするの」

「へー」

「て言うか、勉強したじゃない忘れたの？」

「はは……うん」

沈黙がその場を支配した。

「もお、とにかくメモリーチップをデバイスの差し込みにさして、ベットに入りましたよう」

デバイスの差し込み口と、カプセル型ベットには数字が書かれている、エイルは10番にメモリーチップを差し込み、10番のカプセル型ベットに向かった。

「エイル」

「なんだフリーン」

「この実地訓練が終わったら卒業じゃない」

「ああ、長い間で短かった3年だな」

「終わったら大切な話があるの」

真剣なまなざしでフリーンはエイルの目を見つめてきた。これってまさか。

「わかった」

「うん、じゃあ……おやすみ」

「ああ、おやすみ」

そう言ってカプセル型ベットに横になった、すると空気の抜ける音がしてカプセル型ベットが硝子のようなものに包まれた。

「俺も男だからな、女からは言わせないよ……その時は俺から言うよフリーン」

エイルは誰にも聞こえないように小さく呟いてから目を閉じた。

スリープワープですすむ（後書き）

並行宇宙型ワープとコールドスリープには結構自分の解釈が入ります。

思い出しながらすすむ（前書き）

遅くなりましたがやっと更新できました（＊＾．＾＊）。
ノートPCがなかなか充電できない（p|_）。
みんな頑張って生きていこ／＼（＾o＾）／。

思い出しながらすすむ

……なんか思い出してきたかも。

私は……いや俺は……。

『思い出したか？』

あの時、記憶を思い出せなくて混乱していた時に聞こえてきた幻聴がまた聞こえた。

いや、幻聴じゃないな、お前の名前？呼び方であるのか？

『……あるにはあるが、全部思い出したのか？』

まだ、全部じゃないが……だいたい思い出した……かな。

『なら、続きを見てすべて思い出せ。そしたら名乗ってやるよ』

わかった。

俺はまた夢の中に意識を向けて続きを見ようとする。

コールドスリープ中のエイルの耳に機械的な声が聞こえてきた。

《緊急事態により強制的に覚醒を確認》

《生存が確認された体と、エラーの少ないデータのインストールを優先します》

なんだ、声が聞こえるが意味が分からない。

空気の排出音が鳴り響き、コールドスリープ室の周りに張られていた硝子のようなものが床に収納されていた。

「なんだ……」

重い体を起こしながら周りを見まわす。

「え……なんだ……これ」

周りを見回すとそこには破壊されたコールドスリープ室と血だらけになった人間に埋め尽くされた地獄のような光景が目に見え込んできた。

「なんだよこれ」

夢か、これは夢なのか。

そう、夢ならよかった、しかしこの地獄のような光景も、鼻につく鉄の様な匂いも夢ではない。それは混乱した頭でも解っている、しかし解りたくないからさらに混乱する。

「だれかー……そうだフリーンは」

隣には壊れたコールドスリープ室と血まみれの人間が横たわっていた。

「ウソだろ、フリーン」

混乱しながらも、その血まみれの人間の顔を覗き込んだ。

「あ、違う、フリーンじゃない」

俺は違う人間が死んでいるのを見て、不謹慎ながら安堵した。しかし、周りに無傷なコールドスリープ室は無い、そのことからフリーンが無事とは思えないのも事実だ。とにかく、無事な人間を探そうと周りを調べていく、しかし生きている人間は居なかった。

「なぜこんな事に」

今にも叫びそうな自分の感情を抑えながら、現状を確認するためにこの部屋にある端末からメインコンピュータにアクセスしてみた。

「現状を確認したい」

モニターに話しかけるとそのモニターに現在の自分の乗っている宇

宙船の詳細とともに女性の声が聞こえてきた。

《現状を説明します。現在当艦は所属不明の戦艦による攻撃で並行宇宙の航行を断念、ワープを中断して元の宇宙空間にワープアウトしました。また所属不明の戦艦も、ともにワープアウトし、当艦に直接乗り込んでの攻撃を仕掛けてきています》

「えっ？」

《また当艦の航行機能の80%以上が停止。生存者も貴方を含めて13名しか確認できません》

「はぁ？」

何だそれは？ 本当かよ……。

《至急脱出艇による脱出をお勧めします》

「他の生存者は何処だ」

《貴方以外の12名は、脱出艇に向かうルートを移動中です》

「誰だか解るか？」

《不明です》

「そうか」

……とりあえず合流するしかないか？

「乗り込んできたやつらは何処にいる」

《現在、船首部分のメインコンピュータールームに所属不明の熱反応を確認》

なにが目的だ？

《緊急事態発生、ハッキングによる対抗手段のため当艦は機密保持のための自爆を進言します、また艦長以下、決定権13位までの搭乗員死亡のためメインコンピュータとサブコンピュータ4機による多数決での決定を認証しました》

「なんだ？」

《……賛成3、反対1、条件付き賛成1により当艦の自爆が認証されました。自爆シークエンス起動。当艦は600秒後に自爆します、生存者は至急、脱出艇での避難を実行してください》

「マジ……か」

クソ、とりあえず脱出艇に向かうしかない。ここから脱出艇までのルートは2分ぐらい、艦首から脱出艇までは早くても6分。大丈夫だ、乗り込んできたやつに攻撃を受ける心配はない。コールドスリープのために服以外は身に着けていない、もちろんデバイスもない、攻撃されたら体一つで対抗するしかないが、武器を保持した多数に向かっていくのは流石に無謀だからな。とにかく、脱出艇まで早く向かおう。

「フリーン、どうかそこに居てくれよ」

そう呟いて俺は走りだした。

思い出しながらすすむ（後書き）

地震……怖い／（）。口／（）。口／（）。口／

××の中をすすむ(前書き)

忙しくてなかなか書けませんでした(p | 一)

××の中をすすむ

脱出艇に向かっている途中、通路には多くの人間だったものが散乱していた。ある物は頭が粉々になっていたり、上半身と下半身が真っ二つの物だったり、またある者は体にこぶし大の穴があいてたり、体中ズタズタに切り裂かれている物もいた。最初に見たときは気持ち悪くて吐いてしまったが、そのうち見慣れてくれば、なんとか気にしないで通りすぎるようになっていった。

体の損傷の仕方を見た限り、銃火器や刃物での傷に見える。デバイスによる攻撃は見受けられない、となると他の惑星の種族からの攻撃を受けたのか？

しかし宣戦布告を受けたと言う話は聞かない。

宇宙海賊か？しかし海賊にやすやす船内に侵入されるとは思えない。……考えても切りはないか。

次の曲がり角を左に曲がると脱出艇のあるフロアだ、とにかく他の生き残りとは合流しよう。

曲がり角を曲がると、見知った顔が見えた、エーギル・ミスコル教官だ、すると此方を見ながら教官が思いがけない言葉を紡いだ。

「フリーン、無事だったか」

え？いつの間にフリーンが？俺は周りを見回したがフリーンは居ない。

周りを凄いい勢いで見渡す自分は教官から見れば滑稽に見えたかもしれない。

「どうしたフリーン？」

教官は俺に対して喋ってる……と思う。

「あの、教官？」

「なんだ」

「俺ですか？」

「何がだ？」

「おれ……エイルですが」

「はあ？お前はフリーンだろ、そうにしか見えんが？自分の顔は見えんが体は見えるだろ？」

そう言われて自分の体を見下ろせば、確かに胸が……はっ？なにどういう事？

「教官、俺、え、俺はエイルですだって俺、俺は」

「解った、落ち着け」

「は、はい」

「なら、お前は体はフリーンで、記憶はエイルってことか？」

「は、はい……多分ですが」

なんでこうなった。

教官は考えてから真剣な目で残酷な現実を語った。

「お前のほかに、お前の居たコールドスリープ室に生き残りは居たか？」

「俺が起きた時には見当たりませんでした」

「お前の居た部屋にあった聖霊の欠片の入った万能型デバイスに傷はあったか？」

「確認はしてませんが、あの部屋にあった物はすべてめちゃくちゃになってました」

「そうか……落ち着いて聞けよ」

「は……はい」

「多分だが、デバイスの中にあった無傷の記憶データとコールドスリープ室にあった、無傷の体がエイルの記憶データと、フリーンの体しか無かったんだろう、その事からデバイスが人命救助の観点から、その二つを生かそうと判断して今のお前の状態になったんだろう」

「え、それって」

「言いにくいがフリーンの記憶データは壊れてるし、お前の体は死んだと言う事だ」

なにを言ってる、それってフリーンはどうなったて事、俺はどうなつたて事？

「兎に角、脱出艇に乗れ、侵入者に気づかれれば殺される、脱出してから考えろ」

「は、でも」

「でも、じゃない、フリーンは死んだ、お前は生きてるそういう事だ、それともお前もここで死ぬのか？」

「え、いえ」

「体はフリーンだが、お前はエイルだろ、本国に戻れば違うクロール体に記憶は移せる。フリーンの親御さんに、せめて体だけでも返してやれ」

「はっ、はい」

「それと、これを持っていけ」

そう言うとお教官は七色に輝く指輪を渡してきた。

「これは？」

「賊の狙いはこれだ、新型の聖霊の欠片で作った万能型デバイスだ」

「なぜ俺に」

「俺はここで賊の足止めをせねばならん」

「教官」

「いけ、生き延びろ」

「は……い、今までありがとうございます」

「ああ」

教官の目は有無を言わさぬ迫力があつた、なにを言っても一緒には逃げてくれないだろう、なら俺は何も言う事は出来ない。

走って脱出艇に乗り込み、扉を閉める寸前に、教官の居た場所に爆音とともに一斉に銃弾の雨が降った。

脱出艇のエンジンに火が付き体にGがかかり戦艦からの脱出を果たした。

教官から渡されたデバイスを右手の薬指にはめて、疲れていたのか俺は眠りに落ちた。

脱出艇からすすむ(前書き)

更新遅くてすみません(「」)<

脱出艇からすすむ

《おい》

《おい、お前が俺のご主人か？》

脱出艇の中で眠っていると不意に声が聞こえてきた。

《おい、聞いているのか？》

「だれだ」

俺は狭い脱出艇の中を隅々まで見渡すが、自分以外に人間が乗って居ないのを確認して疲れから来る幻聴か？と思い目を閉じようとした。

《おーい、無視ですか？》

……幻聴……では無いっぽい。

「だれだ」

《お前の右手の薬指を見ろよ》

右手の薬指？……デバイスか。

脱出艇に乗ってすぐ、無意識に七色に輝く指輪型の万能型デバイスを嵌めて居た事を思い出す。

右手の薬指に嵌っている、教官から渡された万能型デバイスを見ようとして固まってしまう。

……あれ？指輪がない。

「指輪が無くなってる」

《無くなった訳じゃねえよ》

「どう言う事だ？」

《俺は指に嵌めることでその人間と一体になるように作られてた》
「要するにどう言う事だ」

《だから、お前が指輪を嵌めた事によって、お前の体と俺が融合したって事だ》

「マジですか」

《良いじゃねえか、すげえ事だぜ、俺は風の聖霊のアリエルだ、お前は？》

「俺は……エイル」

《エイル？男みたいな名前だな》

「……」

《ん？お前の魂の色は男っぽいな？》

「そんな事解るのか？」

《ああ、でも気にするな、直に女っぽくなる》

「どう言う意味だ」

《そのまんまの意味だよ、魂は体に引っ張られるもんだ、今は男っぽい魂の色してるが、その内女の色になる、体がそんな女らしいんだから絶対だぜ》

「……そうか」

《なんだよ、女っぽくなるのが嫌なのか？》

「じつは……」

俺はアリエルに自分は記憶がエイルで体がフリーンである事を語った。

「……て言う事なんだけど」

《なるほどな……うん》

「何か気になる事でもあるのか？」

《多分だが、猶予は30日ってどこか》

「何の猶予だ？」

《さっき魂は体に引っ張られるって言っただろ》

「ああ」

《お前の魂ってエイルの物かフリーンの物かどちらか解るか？》

「え？」

確かに、記憶はエイル、体はフリーン、魂は？そもそも魂ってなんだ？記憶……では無いよな、しかし体でも無いよな……でも俺はエイルだ、体がフリーンでもエイルだと言い切れる。
と言う事は魂はエイルの物だと言えるのか？

「多分……エイルか？」

《正解》

「だと問題があるのか？」

《問題大ありだぞ》

「どんな問題だ？」

《お前の体はフリーンだ、記憶はエイルのだが脳はフリーンだ、舌だって心臓だって肝臓だって指だって髪の毛だって、兎に角、記憶と魂以外はフリーンだ》

「ああ」

《と言う事は、考え方とか好きな食べ物とか様々な事がフリーンと同じになってくる》

「なんでさ」

《脳の構造はフリーンがこれまで生きてきた構造だし。食べ物の好み、用は好きな味もフリーンの舌で感じ脳で判断される。考え方だって脳が判断するのだから、結局フリーンの物になる》

「それとさっき言ってた猶予の関係は？」

《今はまだエイルの記憶の経験が勝ってエイルっぽさが出ているが、30日位でフリーンの体が勝ってエイルっぽさが消えるって事》

「それが魂が体に引っ張られるって事か」

《そう言う事だな》

「そうか……」

《今のうちに覚悟しとけよ》

「何の覚悟だよ」

《その内、エイルは消えてフリーンになるって事さ》

「ならないさ、俺はエイルだ、本国に戻ればクローン技術で作った空の男の体に記憶を移して、フリーンの体はフリーンの御両親に帰す」

《……そうか、まあいいさ、俺はお前の今の体と混ざってる、お前がこの体に居る間は俺の力を貸してやるさ》

「ああ……よろしくなアリエル」

《よろしく、フリーン》

「……わざとか？」

《いや、男より女に使われたいからな》

「俺はエイルだ」

《細けえな、30日後にはフリーンになるんだから良いじゃねえか》

「ならないよ」

《はいはい》

「……はあ」

深いため息をつきアリエルの言葉を考えてみる。30日後には俺はフリーンになると……それを防ぐには30日以内に本国に帰らなきゃならない。それには脱出艇が何時発見されるかが重要になる。と言うが無理っぽい、かなりワープで進んで来ていたと思う、コールドスリープしていたから解らないが30日で帰るのは無理じゃないか？とりあえず脱出艇の中にあるコンピューターで計算してみる。脱出艇のコンピューターから女性の声が聞こえてきて計算してくれ

ている。脱出艇にも高性能AIが積まれていた事にちょっと安心する。自分でも計算できるが絶対の自信はないしね。10秒ほどの沈黙の後、コンピューターの画面に計算結果が表示された。

うん、絶望的だ。今の脱出艇の位置から通常の宇宙航行艦で本国まで約35日かかる、高速艇でも25日、無理だ。高速艇が今すぐ脱出艇を発見してくれないと……その可能性は限りなく低い。

エイルが絶望に沈んでいたその時、脱出艇が大きく揺れた。

「何だ？」

『注意してください、攻撃を受けています』

高性能AIが冷静に答える。

「なに？　どう言う事だ」

『攻撃を受けました、攻撃してきたのは、所属不明の小型艦です』

戦艦に侵入してきた賊が追ってきたのか？

「反撃は出来るのか？」

『無理です、本脱出艇に武装は積まれていません』

「逃げ切れそうか？」

『無理です、近くの惑星への不時着を進言します』

「近くの惑星は？」

『惑星スノッリです』

「スノッリ？」

『近年発見された惑星です』

「危険は」

『不明です、一応人型の生活を確認しています』

大きな爆発音とともに脱出艇が大きく揺れた。

「不味いな、考えてる暇はないか、スノッリに向かってくれ」
『了解しました、揺れに注意してください』

脱出艇の椅子に座りなおし、ベルトで体を固定した瞬間に後方に引っ張られるように体が椅子に押し付けられた。加速して一気に惑星スノッリに向かうようだ。逃げ切れないと言っていた以上、途中で落とされるかもしれない、祈る事しかできない。無事に不時着できても、追ってきた賊と戦闘になるかもしれない。不安だが考えても仕方がない、一応アリエルも居るし、聖霊の万能型デバイスなのだから、かなりの力があるだろう。

《まかせろよ》

「心の声に答えるなよ」

《俺はお前の中に居るんだぜ、俺の声は基本お前にしか聞こえないし、お前の考えてる事は基本俺に筒抜けだ》

マジで。

《マジだ》

便利だけどプライバシーが。

《気にするな》

「気になるって」

《兎に角、戦闘になったら任せろ、聖霊の力を見せてやるよ》

「ああ、そうになったらよろしく」

脱出艇が加速の衝撃以外の、被弾による衝撃が酷くなり、高性能

A Iの声が聞こえてきた。

『大気圏に突入しました』

すると今度は細かい横揺れが始まった。多分大気圏に突入した後、大気との摩擦によって期待が揺れているのだろう、結構怖い。しかし大気圏突入時には戦闘機動はむりだ、一先ず助かった。あとは着陸後か、追ってきたら戦闘か、武器は無い、しかしアリエルの力はある、それで何処まで出来るか、だな。ここで死ぬ訳にはいかないから気張るしかないか。

脱出艇からすすむ（後書き）

自宅P Cが壊れた……（p 一）

修理が終わるまで、実家に帰って更新しています。

誤字脱字見返してから投稿しますが、見落としがあるかもです
>〔 〕<

戦いがすすむ

大気圏に突入してから少しして、体に感じる振動が少なくなってきた。もう少しすれば地表に到達するだろう。一応この脱出艇は高性能なので、パラシュートを開いて降下ではなく、逆噴射による着陸ができるので、パラシュート降下によるノロノロ着陸の途中に攻撃されることはないと思うが、脱出艇を追ってきた奴等の攻撃で故障していなければ、である。

『先ほどの攻撃で機体に不具合が生じました、緊急着陸しますので衝撃に備えて下さい』

うあゝ、嫌な予感が当たったな。

衝撃に備えて腕を顔の前から頭にかけて防御態勢を敷く。体はベルトできっちり動かなくなっているので大丈夫だ。

体に力が入るのがわかる、緊張してるなうなどと考えていると一瞬の逆噴射の後、すさまじい衝撃が襲ってきた、不具合がない逆噴射機構を一瞬使用して、機体にかかる衝撃を少しばかり和らげたのだろうか、効果があったのかな？と思うぐらいの衝撃だった。

「痛い」

衝撃が収まり、多分なんとか着陸できたのだろう。さっき声に出したとおり体にかかった負担も大きかったのだろう、とりあえず脱出艇の機能が生きているか確かめてみる。

「現状を教えてください」

高性能AIに話しかける。しばらく無反応だったが雑音とともに声が聞こえてきた。

『ジ……現状ジジ……機能ジジ……ジジジ』

その声が途端にプツンと途切れた。周りで薄っすらと光っていたライトや計器などの光も消えた。

「……だめか」

脱出艇の機能が死んだのだろう。まあ先ほどのように無理な着陸をして機体に深刻なダメージを負ったのだ無理もない。体を固定しているベルトを外し、脱出艇から外に出る。

「う、眩しい」

真っ暗な脱出艇から外に出ると、いきなり目に入ったライトで目が眩む。

「動くな」

なんだ？動くなだと、もう見えない、目が慣れるまでとりあえずその場で動かないでおこう。

「武器を捨てろ」

武器？武器は持ってはいないよな、アリエルは武器と言えば武器だが、解らないだろうし。

「武器はもっていない」

少し大きめの声で叫んだ。

うん、目が慣れてきた、あたりの状況を確認してみる。

あゝ最悪、多分脱出艇を追ってきていた奴らだ、数は……三人か。

アリエル、いけるか？

《ああ、だけど慣れないうちは俺の力を制御しきれないかもしれないかもしれないぜ》

どんな力だよ？

《そうだな、聖霊の力は精霊の力の十倍以上だ、お前に使いきれると思えんが？》

上等、俺を拘束しようと近寄ってきたらやる。

「頭の後ろで手を組み、膝立ちになれ」

言われたとおり頭の後ろで手を組み、膝立ちになると二人がゆっくりと近寄ってくる、手にはライフルを持っている、少し離れたところに居る奴も手にはライフルを持っている。

畜生、全員近づいて来てくれれば楽だったのに。

《そう上手くはいかないだろ》

て言うかお前の使い方って、普通のデバイスと変わらないのか？

《ああ、お前の体と一体になっているが、キーワードを言えば力は使える》

キーワード？

《ああ、呪文みたいに唱えるってやつだな》
なにそれ？

《ん？ああ、わりい、今送るわ》
なにを？

ぐえ、頭いてえ。

頭の中に、アリエルが言っていたキーワードが頭に思い浮かんでいく。いきなり知らない記憶を思い出す、気持ち悪い体験だな。

《いま送ったぞ、どうだ》

そういう事は早めにやってくれ、土壇場でやるなよ。

《うるせえな、間に合ったから良いだろ》

はあ。

アリエルと声の無い言いあいをしていると、目の前に奴ら二人が立ったところだった。

「ウィンド・カッター」

キーワードを呟くと、俺を中心に風が巻き起こり、目の前に居た奴等の血が舞い散った。

「ぎゃ」

「ぐが」

目の前に居た二人は、小さく叫び声をあげて体中を切り裂かれ絶命した。

「貴様」

離れたところに居る奴がライフルを構えた、流石にこの距離は避けれないと思う。

「ウィンド・ウォール」

俺が呟くと同時に、ライフルの弾が発射された。避けられないなら防御すれば良い、体の前方に風の壁が展開される、ライフルの弾は風の壁に阻まれ弾かれていく。

「クソ、貴様何者だ」

そう問われて答える奴はいない。

「ウインド・ブレット」

四つの風の弾丸が、ライフルを連射している奴の腕と足を貫いた。

「ぎゃ」

悲鳴を上げながら倒れる、手足は動かせないだろうが致命傷ではないだろう、聞きたい事があるし死んでもらっては困る。一応警戒しながら近づく。

「おい、聞きたい事がある」

「黙れ女っ、死ね売女がっ」

……怒っていいよね。

先ほど貫いた左足を踏みつける。

「ぎゃあ」

「聞きたい事がある」

「ぐ……う」

もう一度同じ場所を踏みつける。

「ぐぎゃあ」

「聞きたい事がある」

「あぐう」

もう一度踏みつけようと足を上げる。

「まってくれ、話す話すからやめてくれ」

はあ、やっと解ってくれた、軽い拷問なんて良い気分はしないからね。

「お前らは何処の所属だ」

「スノッリ宇宙軍所属……だ、ぐう」

「この惑星はお前らの星と言う事か？」

「ああ……そうだ」

最悪だな、逃げようとして敵の本拠地に乗りこんじゃったよ。

「なぜ俺たちの艦を襲ってきた、目的はなんだ」

「貴様らが我々の星から、神の涙を奪ったからだろうがっ、がは」

「神の涙？」

「そうだ、神の涙は我々スノッリ人にとって命よりも大切なものだった、お前が居た戦艦に神の涙が有るとの情報をもとに、我々は動いたのだ、げほ。貴様が使ったさっきの力は神の涙の力だろうがっ」

「神の涙とはどんな物だ」

「神の涙は拳大の七色に輝くクリスタルの様な物だ、ぐう」

確かに指輪は七色に輝いてたが、拳大の大きさは無かったぞ？

《もしかしたら、俺はその欠片で作られているんじゃないか？》

なるほど……だが確証はないし、そうだとしても俺はこいつ等を許

せない。兎に角この星から脱出しないとだめだ、敵の情報を聞き出すか。

「お前らの軍の装備は？」

「基本、ライフルなどの銃火器だ」

「精霊の力は使わないのか？」

「精霊の力？……我々は魔法は使えない種族だ」

「俺とお前らに見た目の違いはあるか？」

「無い」

と言う事は町などに潜む事は出来るという事か。装備は銃火器と言う事はデバイス以外は基本変わらないという事か。

「今お金持ってる？」

「……あるが」

「有り金全部出せ」

「……はい」

泣きながら財布を俺に渡してきた。紙幣が4枚と硬貨が10枚位か、いくらだこれ。

「よし、後はとりあえず、眠っといてくれ」

「なにをぐえ」

首の上から頸椎を叩き昏倒させる。

《殺さなくていいのか？》

なんか、な。

《今さらか、甘チャンだな》

「解ってるさ、いまさらだって、でも出来るだけ殺したくないって

思うのは普通だろ」

《そうか？》

「兎に角、町に行く、此処に居たらヤバそうだ」

《まあ、好きにしなよ》

はあ、先が見えない。

隠れながらすすむ

戦闘が終わり、隠れるためと情報収集のために、近くの町に向かう事にした。その前に敵に情報を与えないために、脱出艇を自爆させようとしたが、自爆機能がどうやっても起動しないことが分かって焦ったが、何時までも此処に留まると危険なためやむなく町に移動する事にしたのだが……。

「どこまでも砂と岩山しか見えないな」

そう、見渡す限り砂と岩山しか見えないのである、要するに荒野に1人ぼっち……そうぼっち状態である。一応脱出艇にあった緊急用の食料や水は持ってきたが、それでも持って3日位だ。

「まずい、敵に見つかって殺される前に野垂れ死にそう」

かなり歩いてきた、あたりが暗くなってきたので、近くにあった岩場に向かい少し窪んだ所を見つけ休むことにした。

「疲れた、20キロくらい歩いたか」

《ごくろうさま》

……むかっと来た、が口には出さない、アリエルも感じただろう。

《そうむかっとするなよ、1人さびしい1人旅より、俺と言うナイスガイが居た方が良いだろ？》

「はあ、まあ話し相手がいた方が気は紛れるけど」

《町はまだ見えないよな》

「ああ、一応水や食料は節約してるけど、限度がある」

《なるほど》

「敵も俺を探索はしてると思うが、今のところ出逢わないし、モンスターに襲われるかと思ったけど、今のところ見当たらない」

《ふむふむ》

「しかしこの星はほとんど地球と同じだと思う」

《地球？》

「俺の出身星だよ」

《俺はお前の見えてる風景や、聞こえてる音は聞こえるが、今見てるスノツリと変わらないという事か？》

「ああ、大気を感じとか重力、生態系も今のところ変わりないと思う」

《ほうほう》

「ただし、太陽が1つなのは変わらないが、月は地球では1つ、スノツリは三つだな」

《へえ》

「しかしお前、以外に聞き上手だな」

《そうか？》

「そうだ」

《まあ、寝る前の暇つぶしだ、お前の故郷での昔話でも聞かせろよ》
「ああ……そうだな……」

俺は思い出すように語っていた。

俺は地球のアルトメリアと言う大陸の小さなカンリホルニヤと言う町で生まれた、家族は優しい両親と妹の4人家族、爺さんや婆さんは俺が生まれる前に死んでしまったらしい、裕福ではないが貧しくない、ごくごく普通の家庭で生まれた。

父は連合宇宙軍の兵站部勤務、物資輸送などで宇宙を飛び回っていたため、家に居ることは少なかったが、たまに帰ってきたときには愛情を注いでくれたし、母は優しく聡明だったので、さびしくは思え、不満は無い幸せな生活を送っていた。

俺は15歳の時、父の勧めで軍の士官学校に入学した、士官学校の入学試験は厳しかったが、父や母が、小さいときから教育を施してくれたおかげで、無事入学できた。

入学して初めてできた友達がフリーンだ、出会いは学科の時間だった、席が隣同士になり、何気なく昼を一緒に食べるようになり仲良くなった。

入学して3年、俺もフリーンも士官学校ではそれなりに優秀な成績を収め、士官学校に居ながら准尉の階級を承っていた。

因みに准尉とは、特務曹長の意味で、士官学校で少尉候補者教育を受けた者に授与される。

まあ簡単に言うと、あと少し功績をあげれば少尉になる予定の人、て感じかな。

まあ、その階級をもらっていたため、士官学校に居ながら、様々な依頼と言うか任務をやらされて大変だった、フリーンと二人で、月や火星に物資輸送船で物資を送ったりしたのは、色んな意味で良い思い出。

そして士官学校の実地訓練でコールドスリープによるワープで地球から遠く離れた、惑星ゲルセミに向かっているところ今回の事が起こった。

長い様で短い昔語りが終わって一瞬の静寂の後アリエルが鬱になる事を言った。

《あと29日かな》

「いきなりだな」

《それまでに帰るのは難しそうだな》

「はあ、嫌な事思い出さすなよ」

《少しは眠くなってきたか？》

「まあ、話疲れたと言えば、そうだな」

《お前が寝てる間に警戒はしといてやる、安心しな》

「……なら遠慮なく寝かせてもらおう」

《ああ、本体に死なれたら俺もヤバイしな》

「……」

《おやすみ、エイル准尉》

「なんか含みがある言い方だが、おやすみ」

俺は眼を閉じ疲れた体を休めることにした。

隠れながらすすむ（後書き）

余震、何時になったら収まるんだろう……。
余震で震度6って……マジ怖いんですけど／（。ロ／（。／ロ。／

町が全く見えないようでもすすむ

《あ……お……》

《朝だ、おきろ》

「あ、さ」

重い頭を振りながら起きる。

目に太陽の光が入り込み否応なしに覚醒を促される。

「アリエル、どの位寝てた？」

《まあ、6時間位かな》

「ぐ、寝過ぎた」

《まあ、敵やモンスターは現れなかったぜ》

「それは良いが……追手が現れないのはおかしいな」

《見当違いな方向を探してんじゃね？》

「むう、それなら良いが」

しかし、やはり辺りを見渡しても建造物は見えないな、少し不味いか……行き先を限定させないために情報を聞き出す時、町の位置を聞かずに気絶させたが失敗か？食料や水も後2日位しか持たないし。しかし不味いなこの保存食……固形スティックの保存食しかないけどこれってパッサパサだから喉渇くし、本国に帰ったら固形じゃなくゼリー状とかにしてくれて文句言ってる。

「うむ、ごちそうさま」

さて、出発するか。そう言えば昨日、あんまり考えずにアリエルの

力を使ったけど、結構凄い威力だったな。

《まだまだだぜ、俺の力の2／3割位しか使えてない》

「そうなの？」

《ああ、まあ使ってるうちになれてくるだろ、とりあえずバンバン使え》

「そんなバンバン使って俺に影響ないのか？」

《まあ精神力？みたいのは減るんじゃないね》

「精神力？」

《ああ、小さい精霊の欠片を使う場合はあんま感じないだろうけど、俺位の聖霊の欠片の場合、お前の精神の力を代償に力を行使すんだよね》

「それって使いすぎると体に異常出たりするのかな？」

《まあ、だるくなったりするだろうな、もちろん精神力を使い切ったら力は行使できなくなるぜ》

「じゃあ無駄に使って、もしもの時に使えなくなったら不味いだろ」

《使わなきゃ何時までも力の使い方は上達しねえ》

「むう、じゃあどの位使うと限界かってわかるか？」

《そうだな……昨日使ったウィンド・カッターとウィンド・ウォールが3で、ウィンド・ブレットが2だとして、お前の最大値が60位だな》

「お、結構使えるね」

《まあ、寝て最大値まで回復してるしな、気になった時は、俺に聞けば何時でも現在の精神力の値を教えてやるよ》

「精神力の値はSPと呼称しようと思いますが？」

《SP？》

「ああ、spirit pointの略」

《まあ、良いんじゃないね？》

「因みにSPを使わない力は無いのか」

《俺には無いな、まあサーチなら1だけ》

「サーチ？」

《ああ、お前を中心に風を起こして周りの状態を調べるって技だ、力の使い方に馴れれば半径2〜3キロくらいまでサーチ出来るけど、今のお前じゃ2〜300メートルが限界かな》

「2〜300メートルでも凄いで、索敵に持って来いじゃないか」

《まあ、そうだな》

「よし、なら歩きながら、たまにサーチを使うようにしよう」

《了解》

「とりあえず、サーチ」

俺の体を中心に微風が波紋のように広がって行くのが解る。頭の中に微風の通った場所の地図の様な物が見えてきた、結構詳細に見えるが岩や木の陰は解りにくい、多分風が当たって無いところは見えないんだな。

「よし、人やモンスターはサーチした中には居ないな」

じゃ、歩きますか。

くそ、まったく人っ子一人見えない。あつい、もう朝から4時間は歩いてるぞ。

「とりあえずサーチ」

んゝ頭に入ってくる情報はゝ、何もしかり、お？端っこの方に柵みたいのが見えるぞ、何だ？とりあえず向かってみるか。

柵の様な物はまさしく柵だった、しかし地平線まで続いている柵だな、何だろう。

柵に近づくと看板がある、が読めない。絵も描いてあるが、これはモンスターが柵の中に居てドクロマークが描いてある。多分この中にモンスターが居るってことか？なら行かないほうが良いな。取り合えず柵沿いに移動してみるか。

柵沿いに移動する事3時間、ゲートの様なものが見えてきた。

「サーチ」

ふわっと微風が起こる。

うむゲート周辺に人はいない、ゲートに2人か、武装は、しているけど詳しくは解らないな、多分大きさから2日前に戦った奴らと同じライフルだな。隠れて近づいて反撃を受けないように奇襲かな？

「アリエルSPは？」

《いま39だな》

「よし」

気づかれないようにゆっくり進む、敵まで200メートルで所だな。

「アクセル」

体がフワッと軽くなった、走りだす、アクセルの効果で普段の2倍位の速さで走る、まさしく加速だ。敵が気づいてライフルを発射してきた、しかし当たる前に左右にステップしながら接近する。

「ぎゃ」

敵の一人に蹴りをくらわす、側頭部に見舞った蹴りはアクセルの効果で普段の2倍のスピードでヒットした、スピードが上がり威力も上がったようだ、頭蓋を破碎したようで、倒れた敵は一言悲鳴を發した後痙攣している。もう一人の敵は恐怖に体がすくんだのか、ライフルを構えながらも、固まったかのように、細かく震えながら此方をうかがうだけだ。確かに普通の人間にしたら恐ろしいだろう、ライフルの弾をよけながら接近してきて、目にも止まらないハイキック、頭蓋を破碎する嫌な音に、目が飛び出し、耳や鼻や口から血を吐く同僚をまじかで見れば、恐怖に慄くのも解る、しかし、今のところ君を殺したく無良いんだよね、情報がほしいし。

「武器を捨てろ」

「ヒィ」

体を震わせるだけで武器を捨てられないようだ、まさしく恐慌状態。不味いな、こうなると何するか分かんない、下手したら殺しちゃうよ？こっちは歩きっぱなしでちょっとムカついてんのに、手を掛けさせんなよ。

「殺しはしない、ゆっくり武器を捨てろ」

「はひい」

だめだ、武器を捨てようとしな。仕方がない、近づいて武装解除させるか。

「少し近づくぞ」

手を伸ばし、近づこうとする。

「ヒィー」

いきなりライフルを発射してきた。

「クソ」

右側に飛び退く、しかし至近距離の攻撃だったために左腕に掠った。服が切れ鮮血が舞う、掠ったといってもライフルの弾だ、肉は抉れただろう、痛い。結構ムカツと来た。

「トルネード」

敵の足元から竜巻が巻き起こる、直径2メートルほどの竜巻が空高く舞い上がる。

「ぎひゃ」

カツとしてやった、後悔はしていない。

嘘です、後悔してます、竜巻に巻き込まれた敵は体中切り裂かれ、空高く舞い上がり、竜巻の発生源から10メートル位離れた所に吹き飛び、空高く頭から落下した影響で、頭部が潰れたトマト状態だ、竜巻は近くのゲートを破壊してやっと消えた。

……やってしまった、唯一の情報源を殺ってしまった。

《あゝあ、殺っちゃったね》

「ぐ、取り合えず殺ってしまったのはしょうがない」

壊れてぐちゃぐちゃなゲートを調べる、何かないか？

無い、何も無い。

敵の持ち物を調べる、蹴り殺した敵の持ち物は、ライフル、ライタ1、タバコ、ライターだけパクル。もう一人は、チョコバー×3、

飴×5、水筒……何こいつ？遠足じゃねえぞ、まあ有り難いからパクルけど。

しかしやばいな、町に行く手がかりすらない、周りを見渡してもやはり何もない。

「アリエル、SPは」

《残り15だ》

「15？減りすぎじゃない」

《アクセルが4、トルネードが20》

「トルネード20？」

『そう』

「まさしく、やってしまった、無駄にSP使った」

《もう少し冷静に殺れよ》

「むう、いて、落ち着いたら左腕が痛くなってきた」

《アドレナリンが切れたんだろ》

「クソ」

服を脱ぎ傷ついた腕を見る、2センチくらい棒状に肉が挟れている、深さはさほど無い救急キットを出し消毒して、止血シートを張っておく、この止血シートかなり高性能で、この位の傷なら2〜3日すれば傷が消えてしまう。

「ちょっと疲れたな、幸いゲートの一部が残っている、風雨は凌げるし少し休もう」

《長居するのは不味いんじゃないか？》

「少しだよ、ちょっと休むだけ」

少し崩れたゲートの中に入って、スペースを見つけ横になる、異様に疲れた。

《多分トルネードのせいだろ、慣れてないのに一気にSPを使った

ため、疲れが一気に来たんだ」

「そうか……」

《なんかあったら起こす》

「うん、おね……が、い」

町が全く見えないようにでもすすむ（後書き）

回想編？長いな、もうちょっと早く終わらせるつもりだったんですが……。

読んで下さってる皆様ありがとう（――）（――）（――）

不味いな囲まれた？でもすすむ

《起きろ》

「……うゝん」

《起きろ、囲まれてるぞ》

「……なに？」

疲れて少し眠ってしまった、気づけば辺りは夕暮れ、しかし辺りをうかがっても敵の影は見えない。

「何処だ？」

《こー言う時の為のサーチだろ》

「……サーチ」

辺りに微風が起こる、不味いな囲まれてる、数は10か……一個分隊って所か。ゲートの後ろ側には人員が配置されてない、逃げるならそっちか、事前に見た看板の通りならモンスターは縄張りだろうから危険はあるが……、流石に分隊相手に突破は無理だろう、サーチで見た感じ連携の取れた動きをしてるし、ゲートに居た奴らみたくにちよろくは無いはず。

「アリエルSPは？」

《26だな》

「ちよっと回復したか……やはり此処はゲートの中に逃げるしかないか」

しかし、よく考えたら逃げ道を残した状態で言うのが気持ち悪いな、罠の可能性もあるか、まあ罠だろうが、そっちに逃げるしか逃げる切れる可能性はないし、四の五の言ってられないか。一発トルネードでもかましてビビらせて、その隙に逃げるか……。

《それはやめた方がいい》

「なぜだ？」

《消費SPが20だ残りが6になる、さっきみたいに体が持たないかもしれない》

「使ったら動きが取れなくなるかもって事か……なら消費を抑えて相手の動きをけん制できるのではないか？」

《うーん、そうだな……ウインド・バーストかなSP消費は8、敵さんの中心に発生させれば良いと思うぜ？》

「残りSP18か、さらにアクセルを使って14かかなり減るな」

《ああ、でも一気に減る量は12と抑えられる、多分大丈夫だ》

「了解、それで行こう」

崩れたゲートの隙間から敵の様子をうかがう、今度は肉眼で確認できた、距離100メートル位のところに自分を起点に扇状に包囲されてる、用はゲートの中に入らずに囲んでる状態だ、だいたい中心にの位置を覚えて体を起こし何時でも走れるようにしておく。

「アクセル」

体にアリエルの力が満ちる、これで普段の2倍程度のスピードが出るだろう、次に敵の中心の位置に向かって右手をかざす。

「ウインド・バースト！」

敵の中心、地上から3メートルくらいのところに、直径1メートルくらいの円状の風の塊が出現した、まるで風の強い日の隙間風の高くない音が聞こえる、敵も何事かとその場で構えをとった。高い音が聞こえなくなる、一瞬の静寂の後、圧縮された空気が弾け、大きな爆発音と共に突風が吹く、その突風は近くに居た敵を5メートルほどふっ飛ばし遠くに居た敵も体をかがめて耐えるような体制を取るほどだ、その一瞬で俺は体をゲートから飛び出させた、アクセルの効果で弾丸のように走り出し、敵からの逃走を図る。敵はウィンド・バーストの効果で耳鳴りが酷く、綺麗な扇状の包囲も乱れ、連携が取れなくなっていた。しかしターゲットの逃走に気づくと、気づいた順にライフルを撃ちながら追撃を始める。俺は一直線に走らず、ランダムに走るラインを変えながら逃げる、体のすぐ傍を弾丸が通過していく、いかに弾丸のように走るといっても、所詮＞ようにくである、本物の弾丸のスピードにはかなわない、ただ早くなった動きで弾丸の直撃だけは避ける。

「きついか」

《そうだな》

「何人追ってきてる？」

《うゝん、殺気とかしか感じれないから何人かは解らん》

「くそ、役立たずが」

《何だと！……ちっ、一瞬でも良いから後ろを振り返れ、お前には数えられんだろうが、俺なら一瞬でも視界に入れば解る》

「よし、一瞬だな」

ランダムに回避しながら一瞬だけ後ろを振り返る、その行動の結果、回避が疎かになり右の肩に弾丸を受けてしまった。

「ぐう」

痛みをこらえ再度ランダムに回避しながら逃げる、かなり痛いが骨や神経はなんとか平気そうだ、痛みはあるが腕は動かせる。

「見えたか？」

《ああ、5人追ってきてる、近くで50メートル、遠くで150メートルってとこだ》

5人か、ウィンド・バーストの近くに居たのが3人、その三人は暫く行動不能だろう、それを放っては来れないから1人は残ったはず、すると4人残ったはず、追って来てるのは5人、5+4=9、1人たりない。

「ほんとに5人か？」

《ああ、視界に捉えたのは5人だぜ》

と言う事は1人、最悪2人廻り込んだりしてるとって事か。状況悪化って事か……、このまま逃げてても振り切れそうにない、アクセルで速くなっても、回避しながらだから敵との距離が離れないし、アクセルの効果が切れたら、スピードダウンして追いつかれる、此処は少しでも有利な場所を見つけて戦うしかないか。

「サーチ」

サーチで辺りを探る、左前方約300メートルに、多分廃墟と化したビルのようなものがある、そこに逃げ込み、隠れながら殺るしかない。残りSP13か、かなりきついがそれで頑張るしかない、こんな事なら殺した敵のライフを奪っとけば良かったか？でもライフは重いから、スピードが落ちるだろうから逃げられずに殺られちゃっただろうからなく。

前方に廃墟と化したビルが見えてきた、もしかしたらモンスターの巣になってるかもしれない、しかし何もない荒野で退治するよりは遥かにマシだ。廃墟まで残り50メートルという所でアクセルの効果は切れて、今まで羽のように軽かった体が、本来の重みに戻ったのが解る。

「く、ヤバイ」

アクセルの効果は切れた途端に体にライフルの弾が掠りだした、このままじゃ避けきれない。

「ぐあ」

左の脇にライフルの弾が当たった、腰から上に10センチ、体の端から3センチくらいの所だ。弾は背中側から入って前面に抜けた、骨や臓器には当たって無いが、一気に走るスピードが落ちる、このままじゃ的だ。

「くう、アクセル」

アクセルを使い、一気に廃墟の中に退避する。廃墟の中は動物の骨の様な物が散乱している、やはりモンスターの巣になっている可能性が高い、敵は一旦廃墟の外で集結しようとしているのか追ってこない、この隙に奥に行つて隠れ傷の手当てをしよう、血が流れ過ぎるとヤバイ。

不味いな囲まれた？でもすすむ（後書き）

うわゝ自宅のPS3が壊れたよゝ／（。ロ／）（／ロ。）／
電源を入れようとすると、ピピッと鳴って電源ランプが、緑⇒黄⇒
赤点滅、になる、保証期間終わってるし、修理に出したらお金掛か
るのかな（――）？

兎に角、読んで下さってる方に感謝＞（――）＜。

モンスターってなかなか強いけどすすむ

廃墟の奥まで進む、外から見た限り5階位まで有りそうだったので、注意しながら階段が何か所か2か所か調べつつ上の階に上がって行く。階段はビルに入って少し行ったところと、奥にあった、これ以上上がった場合、追いつめられる事は無くなったが、挟まれる可能性は出てきた、しかし敵から離れるためにも階段を上って行くことにした。

「サーチ」

ビルの中を自分を中心に微風が通り抜けていく、上の階まで風が通り、ビルの隅々まで調べる事が出来た。やはり五階建てだった、しかし3階と5階にトカゲの様なモンスターが居る、しかしモンスタ―を避けながら5階まで行けそうだ、取り合えず上まで言って傷の手当てをして、作戦を考えよう。

3階まで登った所でモンスターが見えた、大きさは2メートル位、暗いためにはっきりとは見えないが目が無い、そして耳が異様にでかい、もしかして音で獲物を察知するタイプなのか？確認の為、危険だがモンスターに見えるよう身を曝した、しかしモンスターに動きは無い、身近にあった小石をモンスターの後方に投げてみた、小さくともはつきりとした音が響く、モンスターは耳を小刻みに震わせながら音のした方に動き出した、やはり目は見え、音で判断しているようだ、これならば音さえ立てなければ襲われる事は無さそう
だ。

それから音をたてないように5階まで上がって、ドアのある一室に入り傷の手当てをする、右肩の傷と腹部の傷、弾丸が通過しているので、計4か所から血が出ているのだが、かなり出血しているので

止血剤を塗り、止血シートを張っておいた。取り合えず傷の手当てが終わり一息ついた所で大変な事に気づいた、先ほどのモンスターの反応を試した時、この血の匂いで気づかれる心配をしていなかった事だ、目が無くて、耳が大きいからと言って、匂いが解らない訳ではない、しかしあの出血で気づかないなら、鼻も無いのかな? と思った。

SPは8か?

《ああ、残り8だな》

声でモンスターに気づかれないう、頭の中で話す事にした。

不味いな、8しかかなアクセル1回にウィンド・カッターなら1回、ウィンド。ブレットなら2回か、それで5人を相手にするって事がキツイな。

《SP使い切ったら倒れると思うぞ》
具体的にどうなる?

《気絶する、2〜3時間は起きないと思う》
それは……なら残り1なら?

《もっと俺の力を使う事に馴れてりゃ残り0だろうが何ともなかっただろうが、今なら1残しても気絶するだろうな》
そうか、なら力はなるべく使わないようにしないとダメか。

どうやって敵と戦うか考えていると、下の階からモンスターの叫び声と、ライフルの発射音が聞こえてきた、かなり大きな音だ、5階の居たモンスターも下の階に向かって言ったようだ。

ラッキー! モンスターと共倒れにはならないだろうが、今のうちに逃げよう。

3階まで下りてきた、まだ戦闘は続いてる、物陰から様子をうかが

った所、モンスターが3匹、敵が5人いる、モンスターは1匹は死んでいるようだが、敵は3人も倒れている、凄いぞモンスター、敵を倒してくれている、もしかしたらと思ひすこし様子をうかがっていると、敵が全員倒れ、モンスターに食われていった。

凄い、共倒れとまで行かなくとも、2〜3人減らしてくれれば儲け物と思ってたが、全滅させてくれるとは。これなら、此処で休んで言ってもいいかな？

先ほど傷の手当てをした部屋の戻り、入口にバリケードをして少し休むことにした。

アリエル、周囲を警戒しててくれるか？

《ああ》

体を横にして目を閉じた。

《起きろ》

《おい！起きろ》

うん、何だ、何かあったか？

《モンスターの声が聞こえたぞ》

耳を澄ましてみると、モンスターの声が断続的に響いてくる。

なんだ？アリエルどれくらい回復した？

《残り14だ》

14か、回復量はどの位なんだ？

《1時間寝て、回復値は最大値の1割位だな》

なるほど、入口のバリケードをどかし、外の様子をうかがう、5階にはモンスターも敵もいないようだ。

「サーチ」

3階にモンスターが2匹、人間が2人、追手か？しかしライフルの発射音は聞こえない。3階まで下りて敵か確認しよう。

3階に下り、物陰から様子をうかがってみた、そこには追いつめられるモンスターと、追いつめる3人の人間が居た。3人組の出で立ちは今までの敵の出で立ちとは違い、大きな幅広の彎曲した刀とハルバートの様な斧槍に弓矢と、布に急所部に鎧と言う随分古い装備だった。

なんだ？追手じゃないのか？

暫くするとモンスターは斧槍に頭をかち割られ絶命した。3人組はモンスターの牙を採ったりしている、何をしているのかよく見ようと少し身を乗り出した所で、3人組の一人、弓を持っていた奴が叫んだ。

「誰だ！」

気づかれた。一瞬逃げようとしたが、躊躇した一瞬で刀を持った一人が走り出した。かなり速く、一瞬で接近を許し刀を突き付けられた。

「動くな、動けば殺す」

静かな低い声で警告してきた、顔に布を巻いているが声からして男だろう、動かずに居ると、他の2人も近づいてきた。斧槍の奴は男、弓の奴は女だろう、装備などから、今まで戦ってきた敵とは違いそうだ。

「何処の所属？」

弓矢の女が聞いてきた。しかしどう答えればいいか、敵だった場合、正直に答えれば捕らわれる、かといって現地人の場合、下手な嘘は通じないだろう、どう答えるべきか。

「答えろ！」

斧槍の男が射殺すような目で睨めながら言った。答えなければ殺されそうだ……、どう答えるべきか。

「追われているんだ、所属と言われても、何処にも所属していない」
考えた末、ちよつと嘘をついた。追われているのは本当だが、所属は宇宙連合軍所属だ。

「追われてる？ 犯罪者か？」

「犯罪は犯してないが、ゲートを潜ったのがいけなかったのかも」
刀の男に答えると少し考えるようにしながら、3人が話し合い始めた、小さな声で聞こえない。暫くして話し合いは終わったようだ。

「取り合えず拘束させてもらうわ、お前をどうするかは町に着いてから決める」

「……解った」

此処で抵抗しても無駄だと思い、大人しく従うようにした。今の話を聞いた限り追手ではなさそうだ。弓矢の女が近づいてきた、手には縄を持っている。

「手を縛るから、重ねて前方に出してくれる？」

「おい、後ろ手で縛れよっ」

「相手は女性だぞアウズ」

「関係無いだろヨルズ、なあ関係無いよなダグ？」

「まあ、前でも大丈夫だろう」

「けっ、甘チャンどもが」

手を前に出し組む、ヨルズと言われた弓の女が、縄で手を縛る。

「一応体を調べるから」

ヨルズが足元から首まで、手で触って武器が無いか調べて言った。

「武器は隠してないわね」

「なら行くぞ、歩け」

手を縛った縄を乱暴に引っ張ったのはアウズと言われた斧槍の男だ。

「痛っ！」

「やめろ、俺が持つ」

刀を持っていたダグと言われた男がアウズから縄を奪い引き始めた。

「まだどうなるか分かんないんだ、あまり手荒に扱うな」

「そうよ、このゴリラ」

「ちっ」

「すまない、こいつ脳筋なんだ、町まで行くからついて来てくれ」

「ダグっ！」

「うるさいわよ、モンスターが寄って来るでしょ」

「くっ」

なんか言いあいながら歩き出した、しかしどう言う事だ？スノツリ宇宙軍の奴等とは違う組織か？それとも情報が行き渡って無い末端の奴か、まあ町に行くって言ってたし軍の装備も持って無い事から、違う間わ思うが。

「町まで30分位かかる、歩けるか？」

「問題無い……です」

下手に出てた方がいいか……。町まで30分、意外に近いが逃げる時は気づかなかったな、一面起伏の無い荒野だから、見えそうなものだが。

「あの、町って大きいんですか？」

「ん？ギルヴィの町を知らないのか？」

「はい」

「随分田舎から来たんのね」

「まあ、質問は町に着いてからにしてくれ、あんまり音を出したくない」

「はい、すいません」

ギルヴィの町ね、有名って事なのか？取り合えず今は大人しくこ

いつ等について行くか。

モンスターってなかなか強いけどすすむ（後書き）

P S 3 修理に出したら¥12. 600 掛かるって言われた、しかも中身がダメで初期化されるらしい……orz

最悪だ（p | - ）音楽とか映画とか写真とか全部消えるってことでしょ、

オワター＼（。ロ＼）（／ロ。）／

何はともあれ、読んで下さっている皆様に感謝です＞（ | | ）＜

出会いそしてすすむ

30分荒野をすすむ、特に話は無く大人しく連行された。そろそろ30分かなと思っていたら前方に大きな岩山が見えてきた。

「ついたな」

ダグがかすかに聞き取れる位の声で喋ったが、大岩しか見えない、町などは無さそうだが。

「ついたって？この大岩がギルヴィの町ですか？」

「ああ？ありゃ岩だ、あれが町に見えるなんてバカか？」

「アウズ、口が悪いぞ、初めて来たなら解らないのしょうがないわ」

「取り合えず信号を送れ、ヨルズは周囲の警戒を」

「解った」

「へいへい」

ダグの号令で何か支度を始めた。

ヨルズは細長い望遠鏡の様な物で辺りを見渡している。アウズはラントンの様なものを出して大岩の近くまで歩いて行く、ダグは俺の体を縛った縄を持ちながら佇んでいる。

「周りにモンスターや帝国の奴らは居ないわ」

ヨルズが大声で報告してきた。

「よし、アウズやれ」

「はいよ」

ダグの号令でアウズが持っていたランタンの様な物に手を翳すと、ランタンの様な物に火がともった。アウズの前の大岩に少し削られたような穴が開いていた、その中をよく見ると、レンズの様な物があるのが解る、そのレンズに向けてランタンの様な物の火が点いたり消えたりを繰り返した。

「よし、アウズ、ヨルズ集まれ」

「了解」

「おう」

皆がダグと俺の側に集まる、暫くの沈黙の後大岩の一部が軋む様な音を上げる、その一部が競り上がり、人が3人程横に並んで入れそうな入口が出現した。

「よし行くぞ」

ダグに先を促されその入口に入っていく、中に入って歩きながら周りを伺う、洞窟の様な感じだが壁自体が淡く光っており、洞窟の様な薄気味悪さは無い、岩自体が光を放っているのだろう、不思議だ。入口から横に入って、100メートル位入った所で行き止まりになった。

「奥の方に寄ってくれ」

ダグに促され奥の壁際に寄る。皆が一塊りになった所でヨルズが壁をまさぐる、よく見ると窪みがありその中にボタンの様な物がある。そのボタンを押すと同時に立っていた足場がガタガタと揺れた、そして下の方に潜って行く、まるでエレベーターだ、暫くして目の前が急に明るくなったと思ったら、足場に軽い衝撃を受け下降が終わ

る。

「着いたぞ、此処がギルヴィの町だ」

「……凄い」

そう凄い、目の前には外で見た大岩の下に作られたと思われる町がある、見渡す限りかなり大きな町だ、街並みも美しく、綺麗に舗装された道、元々の岩から作られたであろう家やビル、街灯も設置されているが、周りの岩自体が光を放ち家やビルも淡く光っている、その光景は幻想的でまさしく美しい。そんな美しい街並みに感動しながら歩いて行くと、目の前に大きな門の平屋だが広そうな建物の中に入っていく。

「取り合えず君には、取り調べ、まあ事情聴取を受けてもらう」

「はい」

「此処はギルヴィの町の冒険者ギルドだ」

「冒険者ギルドですか？」

「ああ、まあ帝国市民には解らないのも無理はないな、取り合えず治安を守っている組織だと思っていれば言いよ」

ダグはそう言うと、先を促しながら奥に進んでいく、門を潜り、入口のドアを跨ぎ、ホールを横断していく、ホールには受付の様な所があり、その周りに沢山の人が集まっていた、そのホールの奥にまた受付がありその前まで進む、そこには10代後半位の金髪を腰まで伸ばした可愛い女性が座っていた。

「やあグナー、マスターに面会したい」

グナーと呼ばれた受付の女性が立ち上がる、身長は160?位か、目は青色で肌は白く、金髪に良く合うと思う。

「ギルドマスターに合う理由は？その女性と関係あり？」

「ああ、まあ不審者を連れて来たからね、その対応を相談したいんだが」

「不審者を町の中に入れたの？」

「まあ、怪我もしているし帝国の奴らに追われているそうだし……ね」

「ふうん」

グナーが足の先から頭の先まで舐めるように見てくる、結構嫌な視線だ。

「グナー、君の好みなのは解るがその視線は失礼だぞ」

「あらダグ、私の好みの女の子を貢いでくれる訳じゃないの」

うわあ、そっちの人ですか、うう背中がゾクツとしたぞ。

「はあ、取り合えず一室を借りたい、そこで傷の手当てを受けさせてあげたいのだが？」

「まあ良いわ、奥の待合室を使いなさい」

「了解」

奥の一室に入る、待合室と言っていたが、部屋には大きめのソファーが4つと、長机、大きめの棚が1つと言う簡素なつくりだ、ソファアの1つに座らされると手の縄を解かれた。

「良いんですか？」

「逃げるのかい？」

「いえ、でも」

「まあ、此処まで不審な行動もしなかったし、それ位は信用してい

るって事さ」

「はあ」

「取り合えず傷の手当てをしよう、医者連れてくるから楽にしてくれ、ああ一応この部屋からは出ないでくれよ」

「解りました」

そう言うのとダグは部屋を出て言った、部屋の外にはアウズとヨルズもいたようだ、何かを話しながら一緒に去って行った。

その後しばらくするとダグが医者を連れてきた、しかし大きな傷も俺が事前に治療をしていてすでに傷がふさがり新たな肉もできている、医者は不審がっていたがこれが我が国の技術力だ、しかし無くなった血は戻らないので輸血をしてもらい、体を綺麗に拭いてもらった、血だらけだったしね。

「治療は終わりだな、これからギルドマスター、まあ、この組織の一番偉い人に会ってもらおう、少し待っていてくれ」

「はい」

そう言ってダグと医者は出て言った。しかしこれからどうなるんだ？なんて説明すればいいんだ？てか此処の立ち位置が解らなきゃ答えにくい。帝国と言う言葉が出てきたが、多分俺が戦ったスノッリ宇宙軍の奴らの事を指すのだろう、そしてその帝国の奴らと此処のギルヴィの町の人間は敵対している、敵の敵は味方と言うならギルヴィの町の人間は味方と言う事になるが、そう上手くいくとは思えないし……、まあ成る様にしかないか、下手な嘘はつかない方がいいかもな。

「先生、血液は採取しましたか？」

「ああ、今犯罪者のデータベースにアクセスして照合している」

「勝手にゲートをくぐって来たと言っていましたか？」

「うむ……お出たな」

「どうです？」

「……不法入国者と出ているが、名前や年齢など不明になっている、
と言うか罪状とこの逃げる途中の写真以外不明となっている」

「うーん……怪しい……ですね」

「ああ」

「怪しいなら問いただせば良いだろうが、こんな所で唸るなダグ」

フリーンが居る待合室の少し離れた廊下で、ダグと医者が話していると、大きな男が軽快な口調で話しかけてきた。

「ソール」

「ダグ、取り合えず悩むのは事情を聴いてからだ、そこの待合室だな」

「はい、しかし一応下調べも重要です、それで嘘が解ることも多々ありますし」

「いいから、いくぞ」

「解りました」

そう言うソールとダグは待合室へと進むのだった。

自分の置かれた状況やこれからの事などを考えていると待合室のドアが開き、ダグと大きな男が入って来た、てかなり大きい、身長2m位の大男だ、髪は短く刈られた金髪、筋肉隆々で肌は黒く焼け

ている、歳は30後半位か、健康的なオヤジって感じた。

「やあ、俺はこのギルドのマスター、ソールだこっちはダグ、君は？」

「ああ私は……」

ん？俺はエイルだがフリーンだよ……何と答えよう、エイルだと男の名前で可笑しいよな、フリーンだと見た目との一致は見られるが、俺的にどうなんだ？体は記憶と魂以外はフリーンだし、フリーンと答えるべきか……。

「……私はフリーンだ」

「ふむ、ではフリーン、なぜ帝国に追われている？」

「一応ゲートをくぐったと言っていましたか？」

ふむ、どう答えるべきか、ダグにはとっさに、犯罪は犯していないが、ゲートを潜ったのがいけなかったのかも、と答えているが……正直に話すべきか……。

「どうした？」

ソールが此方を伺うように聴いてくる、まあ不審がついているんだろう。仕方がない、話すか。

「……その、私はこの星の人間ではないんだ」

「ん？どう言う事だ」

俺はソールに地球という惑星の士官学校の訓練中に、スノッリ宇宙軍に襲われ、脱出艇でこの星に逃げ込み、宇宙軍の奴らに追われている途中でダグ達と出逢ったと話した。もちろん俺がエイルの記憶と

魂を持ったフリーンだとか、アリエルの事などは話してはいないが。

「なるほど、まあ嘘はついてい無さそうだが、証明はできない……な」

「はい」

「ソールどうします？」

「まあこの分ならSCは持つていないだろう、それで確かめよう」
「なるほど」

そう言うとソールは折りたたまれたノートパソコンの様な物を出してきた、それを開くと中には、手の形の窪みと、トランプカード位大きさの窪みがある。

「これは？」

「これはSC作成機だ」
ステータスカード

にこやかにソールが語る。

「SCとはなんです？」

「うむ、読んで字のごとく自分のステータスをカードに表示させるのだ、これは一度作成すれば勝手に更新されていく便利なカードだ、その項目は自分の名前、レベル、称号、体力、魔力、筋力、俊敏、運勢、特技、装備、経験値と言うステータスが表示される、その中の称号に自分の所属が現れる、因みに、レベルは最大で100らしい、体力、魔力、筋力、俊敏、運勢は最低がGでF、E、D、C、B、A、Sと上がって行く、しかし運勢は別で基本変わる事はない、特技は特殊能力が表示される、経験値は今まで得た経験値が表示される」

「なるほど、そんな便利な物があるんですか？」

「まあこの星は遥か昔からこう冒険者なんてのがいたからな、それ

でかな」

「なるほど、ではこの手の形の窪みに手を着けばいいんですか？」

「ああ、少しチクツとするが我慢してくれ」

俺がSC作成機に右手を着けると、ソールがランプカード位の窪みにカードを入れた、あれがSCなのだろう、SCをセットすると機械音がすると同時に、人差し指の先にチクツとした痛みを感じた。

「よし出来た、さっそく見させてもらおうか」

ソールがSC作成機からSCを取り出す、それを3人で覗き込むと……。

※ステータスカード

フリーン・フェンサリル

LV..8

称号..連合宇宙軍准尉、魂を引き裂かれし者、神の涙を受けし者

体力..E

魔力..D

筋力…E

俊敏…D

運勢…A

装備…連合宇宙軍支給の服

特技…風の聖霊の力（LV2）、水の精霊の力（LV1）

経験値…3200（次のLVまで400）

と出ていた。これは？高いのか低いのか解らん、称号も3つあるし。どうなんだ？と言う視線をソールに向けてみると。

「うむ、嘘は無かったようだな、しかし魂を引き裂かれし者、神の涙を受けし者とはなんだかよく解らないな、まあ能力地的には普通の冒険者で感じか？特技は魔法か？魔法なら○内のLVは最大10まで上がるぞ、しかし運勢Aは高いな」

「そうですか、でどうなりますか？」

「そうだな、取り合えずうちで預かろう、帝国の敵なら俺たちの仲間だ、ただ働いてはもらうがな、働かざる者食うべからずだ」

「具体的には何をすれば？」

「うちは冒険者ギルドだ、その仕事をしてもらう、まあ詳しい話は明日で良い、今日から家の客間に泊ってくれ、娘に案内させよう、ダグ、グナーの所に案内してやってくれ」

「解りました」

グナーって、もしかしてさっきの……そっちの人ですか。

出会いそしてすすむ（後書き）

すいません、遅ればせながら更新です。

亀更新でほんとごめんなさい＞（―――）＜

今回誤字多いかもです、気になったら指摘していただければ幸いです。

何はともあれ、読んで下さっている皆様に感謝（＊＾。＾＊）。

???がすすむ1

暗い、ここは何処だ？私は誰だ？俺は？自分は？

なぜ私は此処に居る？暗い暗い暗い。

眠い。

寝よう。

薄暗い研究室の中、大きな円柱状の水槽の様な物の前で1人の研究者の男が腕を組み、水槽の様な物の中を眺める。

「くくく、もうすぐだ、長年の私の研究の集大成がもうすぐ完成する」

水槽の様な物の中を眺め、悦に入っただ様な笑顔を浮かべ、その男は笑う。

「くくく、長年探し求めていた純粋な魂は手に入れた、後は最高の体に定着させれば……俺を馬鹿にした奴等を見返せる」

笑顔を浮かべていた男の顔が一瞬憎しみに染まる、しかし思い出したかの様にまた笑顔に変わった。

「そうだ、もうすぐ完成だ、そうすれば、くくく、ははははは、はあーはっはっは」

薄暗い研究室の中研究者の男は飽きもせず笑い続ける。

???.?がすすむ1（後書き）

???.?の話です。まあ所謂複線ですね、わかります。

読んで下さっている皆様に感謝（＊＾。＾＊）。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0528r/>

どこまでもすすむ

2011年5月15日14時04分発行